択と報道は客観的かつ公平にすべきであると論じ、電波メディアについても同様のことがいえると述べている。さらに、新聞所有権の集中化と新聞によるラジオ局・テレビ局の支配の増大化傾向にたいする国民の懸念について言及している。

六の「オタワと州」ならびに七の「ケベックとカナダ」は、「統治しにくい国家」としてのカナダが直面しつつある深刻な政治問題、すなわち、「地域主義」（とくにカナダ西部のそれ）に基づく「忠誠の分裂」（E・R・ブラック）の拡大と、ケベックの分離主義の台頭を原因とするカナダ連邦制の危機を理解するために重要な章である。

邦訳五ページの漫画（本書の各所には、ユーモアと風刺のきいた漫画が掲載されている）と、その解説のために引用されたトルドー首相の言葉――「連邦制とはなんとバランスをとるのがむつかしいことか」――は、端的に右の深刻な政治問題を表現しているといえよう。この漫画は、サーカスの綱渡りの綱のうえで各地域・各州が勝手な〝演技〟をし、トルドーが綱の中央で苦闘している様を描いているが、とくに綱からおりようとするケベックを、トルドーが必死にこれをつかんでそうさせまいとし（これはカナダの統一を確保しようとする努力のことを意味する）、一方、疎外感を強めつつある平原諸州（アルバータ、サスカチュワンおよびマニトバの三州）が、彼の尻を農業用のフォークで突いている様子は、カナダ政治の困難な局面をきわめて象徴的に描写している。本年、連邦政府は、英仏両語の同等性の保障、地域較差の解消、国民の意思と合意に基づく政治等……などをめざす憲法改正案を議会に提出したが、六と七の章は、この改正案の背景やケベックのレファレンダム（州民投票）問題等を知る良き手引きとなるであろう。

終章の「英米との比較」は、行政府、立法府、連邦主義、市民的自由の四つの項目について、カナダ、イギリス、アメリカのあいだにみられる主要な類似点と相違点について記述されている。このような比較は、カナダの政治制度の一層の把握に役立つものと考えられる。

ところで、カナダにとって、米加関係は通常の二国間関係以上のものであって、この関係が経済的、文化的のみならず政治的にもカナダにおよぼしているインパクトは、はかりしれないものがある。この点からも、米加関係についてある程度の記述が必要であるように思われる。さらに、ニュー・フランス時代以来のカナダのネーション・ビルディングの歴史について、一の序言などにおいて言及されていればよかったのではないか。そうすれば、読者（とくに日本人の読者）にとって、フランス系カナダとイギリス系カナダの対立の背景、カナダの政治制度における植民地時代の遺物の存在などについて、理解が一層容易になるのではなかろうか。

邦訳についていえば、訳語に今少し配慮が必要であったと思われる箇所がないでもない。例えば、「立憲機構」（五〇ページ、五一ページ、一一三ページなど）を「憲法」または「統治機構」に、「一元的国家」（一九九ページ）を「単一国家」に訳したほうがよいのではないか。なお、「英国立憲制体」（六二ページ）は「英国立憲政体」のミスであり、「行動の自由」（一七四ページ）は、「移動の自由」のミスであろう。

ともあれ、カナダの政治についての基本的入門書である本書の邦訳が刊行されたことにより、訳者の言葉にしたがっていえば、日本において「カナダへの高まりつつある関心とその国に対する情報不足との間の落差」が埋められ、日本のカナダ研究が一層前進することは疑いのないところである。

（近畿大学助教授）

カナダ北方に関する12冊の本

つい10年ほど前まで、カナダ北方に対する一般の人々の関心は低く、本もピエール・バートンの「クロンダイク」、R.A.J.フィリップスの「カナダの北方」、ファーリー・モーワットの「カナダ北方－1967年」など、2、3を数えるにすぎなかった。ところが、最近は北方に住むインディアンやエスキモー（イヌイット）、生態系、天然資源などへの関心が高まり、いろいろな本が刊行されている。そのうち、読者に興味のありそうな12冊の本を紹介しよう。

● ファーリー・モーワット
Canada North Now (McClelland & Stewart)
自著「1967 Canada North」の改訂版。北方に関する神話をうちくだき、インディアンやエスキモーに対する白人の措置を告発する。本紙3ページを参照。

● エドガー・J・ドスマン
The National Interest; The Politics of Northern Development 1968-75 (McClelland & Stewart)
北方が直面する諸問題を客観的に分析している。

● フィン・シュルツ・ローレンチェン
Arctic (McClelland & Stewart)
北方住民に対する政府の抑圧的政策を非難した本。

● ジョン・フォスター、ジャネット・フォスター
To the Wild Country (Van Nostrand Reinhold)
同じ題名で放送されたCBCテレビの連続番組の作者による、北方紹介の写真版。

● スーザン・コーワン編
We Don't Live in Snow Houses Now
アークティック・ベイに住む人々とのインタビューの記録。

● ウィニフレッド・ペッチリー・マーシュ
People of the Willow (Oxford University Press)
パドリミュイト族エスキモーを描いた絵のコレクション。

● W・A・ケニオン
Tokens of Possession: The Northern Voyages of Martin Frobisher (Royal Ontario Museum)
フロビッシャーの航海を、ケニオン自身の経験を踏まえて、歴史的に解説したもの。

● ウィリアム・R・ハント
A.R.C.T.I.C. Passage (Charles Scribner's Sons)
ベーリング海近辺に住む人々の物語。彼らが初期の探検家たちから、いかに非人間的な扱いを受けたかが紹介されている。

● ジョイス・C・バークハウス
George Dawson, The Little Giant (Clarke, Irwin & Co)
1800年代の末に、今日のユーコン準州を探検したジョージ・ドーソン（彼にちなんでつけられたドーソン市の名前で知られる）に関する少年少女むけの書。

● ウィリアム・レアード・マッキンリー
Karluk (George Weidenfeld and Nicholson)
60年前、不運な目にあった「カールック号」で起ったことについて書いたもの。

● ウィリアム・D・ブランケンシップ
Yukon Gold (Clarke, Irwin & Co.)
ゴールド・ラッシュ時代のドーソン市におけるある警察官についての面白い小説。

● C・W・ニコール
Tikkisi (McClelland and Stewart)
事故がもとで記憶喪失症にかかり、イヌイット（エスキモー）にシャーマン（呪術師）と思い込まれている若い白人の動物学者の目を通して、白人とイヌイットの現実を交差させた小説。著者20年の労作。